

本文章已註冊DOI數位物件識別碼

▶ 否定表現の構造と意味

doi:10.29714/TKJJ.199112.0008

淡江日本論叢, (1), 1991

作者/Author：黃憲堂

頁數/Page：180-199

出版日期/Publication Date：1991/12

引用本篇文獻時，請提供DOI資訊，並透過DOI永久網址取得最正確的書目資訊。

To cite this Article, please include the DOI name in your reference data.

請使用本篇文獻DOI永久網址進行連結:

To link to this Article:

<http://dx.doi.org/10.29714/TKJJ.199112.0008>



DOI Enhanced

DOI是數位物件識別碼（Digital Object Identifier, DOI）的簡稱，是這篇文章在網路上的唯一識別碼，用於永久連結及引用該篇文章。

若想得知更多DOI使用資訊，

請參考 <http://doi.airiti.com>

For more information,

Please see: <http://doi.airiti.com>

請往下捲動至下一頁，開始閱讀本篇文獻

PLEASE SCROLL DOWN FOR ARTICLE



airiti

否定表現の構造と意味

黄 憲 堂

一. はじめに

どの言語でも肯定表現だけでなく、否定（打消）表現も同時に使われる。そして形態的には前者が無標の(unmarked)形を、後者が有標の(marked)形を取るという点でも恐らく共通しているであろう。しかし、この二種類の表現の使用頻度や分布の状態は、言語によってかなり違っていると思われる。なかでも日本語は他の言語に比べて、肯定表現よりも否定表現の方が好まれる場合が多いとよく言われる。この現象を文化論や社会言語学の立場から考える学者が多いが、意味論や構文論の領域に属する否定表現の構造・文法機能などの実態についても考察する必要があると思う。本稿は日本語教育の立場から、現代日本語の否定表現についての意味分析・構文的制限などの整理を試みたものである。

二. 否定の語用論的前提

人間が外界の変化や出来事を感知して記述・伝達する場合、特別な前提がなければ通例否定表現を使わずに肯定表現を使う。例えば、誰かが(1)aのような発話をしたら、聞き手はその情報を受けてびっくりし、被害者が無事であるかどうかを聞き、そして事故の状況について色々な質問を話し手に浴びせるであろう。ところが、話し手がもし何の前提もなしに、いきなり(1)bのような否定表現を用いたら、聞き手は話し手の言わんとする真意が分からず、その異常な発話に首を傾げてしまうに違いない。

(1) a 昨日家内が交通事故に会った。

b 昨日家内が交通事故に会わなかった。

ここで言う否定表現が使える「前提」は色々考えられるが、最も一般的とされるのは、話し手が変化や出来事（普通肯定の形）の発生を予想し、またはそれを信じている場合である。(1)bの例で説明すると、話し手の妻が「交通事故に会ったのではないか」と思われるような事態があって、聞き手がその出来事を予想し信じている場合でなければ、(1)bは適切な発話とは言えない。つまり、この場合の否定表現は間違った予想を正すために使われるのである。極端な例になるが、(2)bのような非過去の文と(3)bの存在文においても同じことが言えるであろう。

(2) a 私はあしたブッシュ大統領と会う。

b 私はあしたブッシュ大統領と会わない。

(3) a 机の上に椅子がある。

b 机の上に椅子がない。

簡単に「ブッシュ大統領と会える」と思われるような前提がなければ、例えば平凡なサラリーマンが(2)bを言ったら、それが非適切だけでなく滑稽にさえ思われる。誰でもこの発話の話し手が「ブッシュ大統領と会おうだろう」と考えないからである。だから、(2)aの情報はうそだろうと指摘されるのだが、(2)bは真実を語っているとは言え、言わば無意味な真実にしかならない。(3)bは「机のうえに椅子を置く」習慣があるとか、あるいは「さき机のうえに椅子があった」といったような事態がなければ、やはり唐突でおかしい発話になる。前提のない(2)bと(3)bが不自然を通り越して滑稽になるのは、否定の方が普通で当たり前の状態だと思われるからであろう。

以上述べたことに反して、普通否定表現を使った方が自然の場合もある。例えば(4)bと(5)bがその典型的な例である。これは一見冒頭に述べたことと矛盾しているように見えるかもしれないが、やはり前述した特別な前提が考えられるのである。

(4) a 異状あり！ (1)

b 異状なし！

(5) a あの日本人は日本語が分かる。

b あの日本人は日本語が分からない。

ひょっとしたら異状があるのではないかと思って機械かなにかを点検する時、確かめた結果、異状があったら(4)aを、正常だったら(4)bを使うが、使用頻度としては(4)bの方がずっと高い。それは確かめた結果、正常の場合、決まり文句として(4)bをよく使うからである。そういう場合、もし(4)bのかわりに「正常だ」と言ったら、論理的にそれほどおかしくはないが、いっしょに作業をしている聞き手が拍子抜けしないとも限らない。一方、「日本人は日本語が分かる」ということはむしろ当然のことで取り立てて言うほどのこともない。だから独立した文脈の中では(5)aよりも(5)bの方が自然である。

否定の形で使われる慣用句が多いが、なかでも(6)a～(6)eのような比喩的表現として用いられるものは、肯定の形にすると、場合によっては比喩的な意味がなくなって、本来の(文字通りの)意味に戻ってしまうことも考えられる。。

(6) a (新製品が売れに売れて) 笑いが止まらない。

b (借金で) 首が回らない。

c (値段が高くて) 手が出ない。

d (妻には) 頭が上がらない。

e 隅に置けない。

これまで見てきた否定の例には、使用する時の特別な心理的背景があり、論理的に色々な類型に分けることが出来るが、語用論的には一貫したきっかけが見られる。つまり、否定の形を使うからには、それなりの必要性(語用論的前提)が認められるのである。この必要性は、真か偽かという論理学で問題にされる真理値(truth value)の如何に左右されることなく、全く認知上ないし情報伝達上の要因に支配されるのである。例えば、前掲の(1)b(2)bと(3)bの各文は、真理値が偽であっても否定表現を使う前提さえあれば、認知や情報伝達の上では立派な発話になる。(もちろん、この場合は話し手の誤認と考えたり、意図的に真実に反した情報を伝えようとする欺瞞行為と考えることもできる。)これとは逆に、もし否定表現を使用する前提がなければ、たとえこれらの各文の内容が真実であっても発話はナンセンスになる。なお、(4)bでは、聞き手が必ずしも「異状がある」と想定しているとは言えないが、「もし異状があったら大変だ」という危機感が強いせいか、否

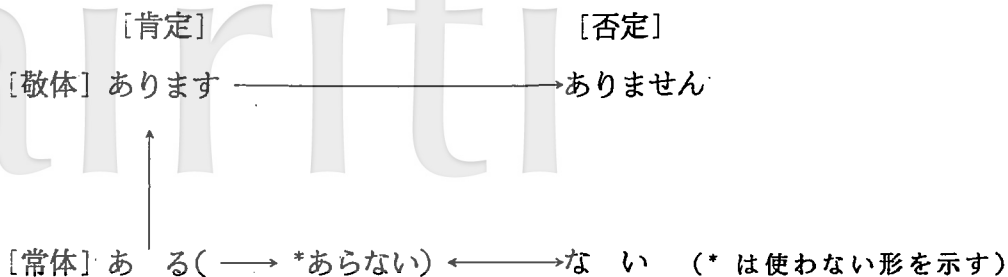
定の形の方がむしろ自然である。(5)bの場合は、普通「日本人なら日本語が分かる」という経験論的な前提に基づいて発するものだから、当然自然な発話である。(5)aの肯定の形は、(5)bに対して反論する場合や「日本人でも日本語が分からない可能性が強い」と信じている時にのみ成り立つ言い方である。最後に(6)a～(6)eの各文を見てみよう。これらは前にも述べたとおり、比喩的な意味として使われるのだから、別個の問題として考えるべきであろう。ただ、これらの意味内容はいずれも尋常でない特別な状態を示すということだけを触れておきたい。

三. 否定の分類

日本語で否定の形を造りうるのは、当然のことながら、用言だけである。名詞は単独では否定も肯定もないのだが、存在の状況や断定の内容について言及するとき、格助詞ガ・ニ・デを介して肯定・否定の形を取りうる。形容動詞（ナ形容詞）も否定形になるが、その意味解釈や構文的制限は助動詞ダの場合とほとんど同じだから、一類を設けなくてもよいと思う。だから、形態的分类を行うときは①一般動詞の否定②形容詞の否定③断定の助動詞ダの否定④存在動詞アルの否定という四種類に分ければ十分であろう。

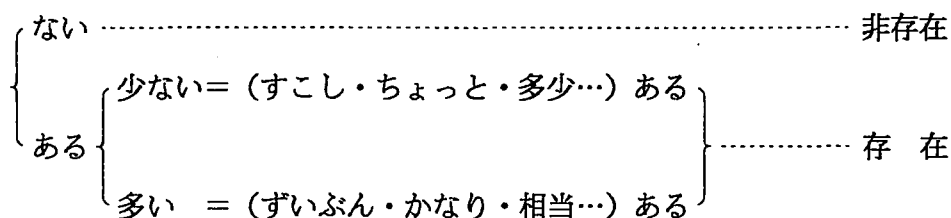
(一) 存在と非存在

現代日本語の常体（ダ体）では、事物の存在を認定する時、肯定の場合「ある」という動詞を使うのに対して、否定の場合は形容詞「ない」を用いる。もちろん敬体（デス体）の場合、「ありません」を使うのだが、これを「ある」の否定形と言うよりも、「あります」の否定形と考えるべきであろう。つまり、下の図式でわかるように「ありません」は「あります」からの派生語であるが、「ない」と「ある」は派生関係がなく両方とも単純語である。「ありません」は意味的には確かに「ある」の否定ではあるが、丁寧さの点では対応していない。



なお、動詞の活用法から考えるなら、「あらない」という否定形はあってもよさそうだが実際使われない。やや文語的な使い方には、「あらぬ」があるが、これも現代語では非存在という意味がなくなり、連体詞としてしか使われない。

事物が存在するかないかという認定は一次的で絶対的なものであって、存在しない場合はあまり問題にならない。ところが、存在すると認定した時、話し手の基準で見た程度差（量の差）を表すことが必要になってくる場合もある。つまり、存在を認めた上でさらに量が多数か少数かについて言及しなければならない場合である。下図のように色々な程度の副詞で修飾したり、あるいは「多い」「少ない」という形容詞で言い換えることができる。



ここに出てくる、存在の有・無・多・少を表す語「ある」「ない」「多い」「少ない」の四語には一つの共通した特徴が見られる。(8)aのように文の述語となる分には差し支えないが、(8)bで見られるように単独で連体修飾成分になりにくいのである。この点は(7)bの「高い」のような、他のいわゆる「属性の形容詞」と違っている。(8)cの「木の多い」「木のない」などは、全体で属性を表し得るから連体修飾ができる。

- (7) a 山は高い。
 b 高い山
- (8) a 山は多い (少ない/ ない/ ある)。
 b *多い (??少ない/ ??ない/ ??ある) 山
 c 木の多い (少ない/ ない/ ある) 山

(? は不自然な形を示し、不自然の度合いは ?の数で示す。)

「ある」と「ない」は単独で名詞を修飾することもあるが、かなり限定された文脈でなければ使えない。「ある」は存在と関係なく、連体詞として《漠然と事物を指す》という意味で使われることが多い。

なお、「ない」は文字通りの非存在の場合と、少ないことを誇張して表現する場合がある。前者の場合は時々(9)aと(9)bのように「全然」「すこしも」「ちっとも」など、否定の呼応を要求する副詞によって強調される。一方(10)aのように「ずいぶん」「かなり」「相当」などの程度の副詞を使った場合もある。非存在の「ない」は本来「無」(ゼロ)であり、程度の差など考えられないにもかかわらず、(10)a はごく自然な文である。この文脈では「ない」は確実に非存在を主張するのでなく、僅かな量の存在を無視して「無」に近い状態と見ているのであろう。

- (9) a 全然 (すこしも/ ちっとも) 金がない。
 b 金が全然 (すこしも/ ちっとも) ない。
- (10) a ずいぶん (かなり/ 相当) 金がない。
 b ?金がずいぶん (?かなり/ ?相当) ない。

次に程度の副詞のあるべき位置を考えてみよう。(9)bは(9)aと同様よい文だが、(10)bは少しスワリが悪いと思われる。(10)aの「お金がない」は、本当の非存在を指すのではなく、どちらかと言えば「貧乏だ」といったような一語相当の意味として解釈される。そういう文脈で程度の副詞を使う場合、その副詞は意味的にひとまとまりとなっている「金がない」の中に割り込みにくく、(10)aのような語順が普通である。また、言うまでもないことだが、「ない」を「少ない」と改め、つまり本来の意味に忠実な表現を用いるなら語順としては(10)a と(10)b のどちらでもかまわない。

主体が無生物の場合「ある」を使うが、有生物の場合「いる」を使わなければならないとよく言われるが、それは(11)のような存在の主体と存在の場所について言うときの話である。(12)b と(12)c のような所有文では「いる」の外に「ある」も使える。なお(12)では所有者を表す名詞句の二格が省略されてもよいことと、後ろの()の中のような、ガ格名詞を主題化(topicalization)した文型が使いにくいことは、(11)の存在文と異なっている。

- (11) a 教室の中には机がある。 (机は教室の中にある。)
b 教室の中には学生がいる。 (学生は教室の中にいる。)
- (12) a 私(に)は車が二台ある。 (*車は私にある。)
b 私(に)は子供が二人ある／いる。 (*子供は私にある／ *いる。)
c あの子(に)は親がない／いない。 (*親はあの子にない／ *いない)

存在文はもっぱら存在を問題にするのだから、有生名詞からでも無生名詞からでも作り得る。所有文は存在物の所有・所属関係に重点を置くのであり、存在物が無生名詞(抽象名詞も含む)の場合たいてい所有文にすることが出来るが、有生名詞を所有物にするには制限がある。例えば(13)a のような動物の所有や、(13)b のような臨時的にできた関係、つまり(12)b と(12)c で見た家族・親友などの固定した緊密な関係でない場合は、不自然である。

- (13) a ??私(に)は猫(犬)がある／??ない。
b ??私(に)は家政婦(弁護士)がある／??ない。(2)

(二) 断定と否定

断定表現は文の主部と述部の間の是・非や一致・不一致などの論理関係についての判断を表すものである。西洋言語なら主部と述部の間にコブラ(繫辞)を入れ、本来無関係の二つの概念を繋ぎ、断定作用を行うところだが、日本語の中ではこのコブラに相当するものが明確に捉えられないから、普通いわゆる断定の助動詞を使って判断をする。因みに日本語は論理性に欠けているなどと盛んに言われるのも、これがその一因ではないかと思われる。日本語の断定表現も前に述べた存在表現と同じ、文体の違いによって色々な異なっ

た形が使えるが、ここでは助動詞「だ」とその否定形の「でない」だけを中心に扱う。

言語の普通の表現では、断定の形があれば、その反対の意味に対応して否定の形も必ず成立する。例えば、断定の場合「これは本だ」と言えるからには、「これは本ではない」という否定の形も自ずから成り立つ。つまり、断定と否定は論理的に対称をなすのが普通である。ところが、日本語の助動詞「だ」はコプラの機能と違うから、使用の場面によっては肯定か否定か片方しかない用法もある。例えば、(14)のような感動や注意を促す発話と(15)のような説得調の発話の場合、対応する否定の形が考えにくい。

(14) a 大変だ！火事だ火事だ！

b あっ、蛇だ！

c みなさん、ご飯ですよ！

(15) a それでだ、君に一つ頼みがあるんだけど…。

b ということはだね、君は行かない方がいいということなんだ。

c 私はですね、あなたのために思ってやったんですよ。

これらの例文の下線部分の「だ」や「です」は、本来の断定の意味から離れて聞き手の注意を引くために使われている。(14)の各例では「だ」や「です」が名詞の直後に付き、いわゆる代動詞的な役割を果たしている。つまり、ある名詞について特に言明しなくても分かる動詞を使わずに、簡潔な断定の助動詞を代用するのである。日常よく耳にする発見時の感動を表す表現（「雨だ」「雪だ」「地震だ」など）もこの心理から来たものであろう。こういった事態を緊急事態としてとらえる場合はダ体しか使わないが、ただの注意喚起を目的とする場合なら、デス体を使うこともある。

一方、(15)の各例文では「だ」や「です」は接続詞や助詞に付いている。これも一種の注意喚起と考えていいが、発話の最終目的は聞き手を強く説得しようということにある。本来文末にしか現れない断定の「だ」や「です」を文節ごとに入れ一言ずつ区切るという話し方は、わざとらしく感じられることもあるが、説得力を増すこともできる。特に接続詞に「だ」を付け、例えば「しかしだ」「ところでだ」のような言い方は説得調の響きが強い。以上この二種類の「だ」は、環境や発話そのものに注意を払うように仕向けることが目的だから、それに対応した否定の形にすることができない。

名詞の後ろに「だ」が付いたらその名詞に対する断定の意と解釈されるのが普通だが、形式名詞に「だ」が付いた場合、その形式名詞が実質的な意味を表さないから、全体の意味は普通の断定からずれ助動詞のようなものになることが多い。(16)の「こと」「もの」は実質名詞と見るから、名詞に対する断定と解釈されるが、(17)abと(18)abの各文では、「ことだ」と「ものだ」が意味的に融合しているように感じられ、いずれも話し手の主張の気持ちを強める表現である。なお(17)の「ことだ」は意志動詞に付き、「最も大事なことだ」という主張の意で、否定の場合、文末の「だ」が否定形を取るのではなく、(17)cのように意志動詞が否定形を取るのである。一方、「ものだ」の接続には意志性という制限がなく、意味も色々考えられるが、「誰でも」「みな」「いつも」などの副詞的な修飾語を使うことが多い。この場合一般的な法則や規則などを引き合いに出して然るべきことを主張する意味になる。意志動詞に「ものだ」が接続した文は、「誰でもそうするのだから、あなたもそうすべきだ」といったような解釈が出来、(18)cのような文末否定の形も取りうる。

- (16) a これは三年前に日本で起きたこと(事)だ。
b おれが死んだら、これは全部お前のもの(物)だ。
- (17) a 風邪気味の時は早く寝ることだ。
b 合格したければ、しっかり勉強することだ。
c 健康でいたいなら、不規則な生活をしないことだ。
- (18) a 年を取ると誰でも目が悪くなるものだ。
b 自分の部屋は自分で掃除するものだ。
c 先生にそんな言葉を使うものではない。

形式名詞「の」に「だ」が付いた用法の種類が多く、意味解釈の可能性も多いが、(19)のような各文はやはり断定の意味とちょっと違うし、文末否定の形も取らない。

- (19) a 本当に忙しいのだ。〔説明〕(〔強調〕)
b どうしても行きたくないのだ。〔強調〕
c 今日は休みだったのだ。〔納得〕

一方(20)abのように「のだ」が意志動詞に付き、しかもその動詞の動作主体が二人称と思われる場合、命令の意と解釈されやすい。また、(20)cのような文末否定の形を取ると禁止の意になる。こういった命令と禁止の使い方では、「の」が「ん」とぞんざいに発音される方が普通である。

- (20) a 早く行くのだ!
- b 全部食べるんだ!
- c 大声を出すんじゃない!

同じ形式名詞と分類されたものの中で、否定形式を取るのに一番自由なのは「わけ」と「はず」であろう。(21)と(22)の各文は、主張の強さについてニュアンスが少しずつ違うが、形式的な制限はほとんどないと言ってよい。

- (21) a 日本語学科の出身だから、日本語が出来るわけだ。(出来ないわけがない)
- b 日本語を習ったことがないから、出来るわけがない。(出来ないわけだ)
- c 日本語が特に出来るわけではないが…。
- (22) a 明日までに出来るはずだ。(出来ないはずがない)
- b 明日までに出来るはずがない。(出来ないはずだ)
- c こんなはずではなかったのだが…。(3)

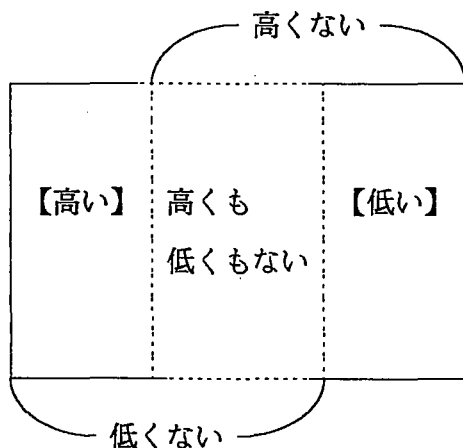
(三) 形容詞の否定と反義語

形容詞の否定は連用形の活用語尾「く」に補助形容詞「ない」を付けることによって作り、意味としては、その形容詞の表す状態を否定するのである。ところで、形容詞には「大きい—小さい」「高い—低い」などのように反義語の関係をなすペアが多いから、形容詞の否定形がその反義語とほぼ同義に使われる場合もある。例えば、(23)(24)のab二文はほとんど同じ内容を意味すると考えられることが多い。

- (23) a この山は高くない。
- b この山は低い。
- (24) a 学校は家から遠くない。

b 学校は家から近い。

もちろん厳密に言うなら「高くもなければ低くもない」「遠くもなければ近くもない」といったような、いわば中間段階も考えられるが、語彙としてはその状態を示すものがない⁽⁴⁾。だから、極端でない状態を控え目に言うとき、形容詞の否定形をよく使う。これは語彙の形になっていない中間段階を意味指示の射程内に含めたいからであろう。この意味で考えるなら、形容詞の肯定と否定の関係は下図のように説明できると思う。



ところが、反義語の関係をなす形容詞は認知上とらえ方の偏りが生じる場合が多い。ごく直観的なとらえ方では、量・程度の多い・高い方（以下ポジティブの形容詞と呼ぶ）を基準にするが、量・程度の少ない・低い方（以下ネガティブの形容詞と呼ぶ）は特別な前提がなければ、普通あまり基準にしない。例えば、(25) a のような程度を示す派生名詞の場合もっぱらポジティブの方を基準にし、ネガティブの形容詞からの派生名詞はほとんど使われない。たとえ、(25) b のようにネガティブの方を強調したいときでも不自然な文になり、やはり(25) c のように言わなければならない。

(25) a この山の高さは3000メートルもある。

b ??この山の低さは80メートルしかない。

c この山の高さは80メートルしかない。

なお、漢語表現の場合、「高低」「長短」「大小」「強弱」などのような反義語からな

る語彙はポジティブの方が前、ネガティブの方が後ろという語順が自然である。「低高」「短長」「小大」「弱強」といったような言い方は成り立たない。また「高度」「濃度」「身長」「体重」などは言えても、「低度」「淡度」「身短」「体軽」などの言い方は、たとえネガティブの状態を強調したくても使えない⁽⁵⁾。これと関連して、使用上ネガティブの形容詞の否定はポジティブの方の否定よりも制限が多い。(26) aはごく自然な発話だが、(26) bはなんとなく落ち着かない。一方、(26) cのように、否定の前提がはっきり存在する場合なら、自然な文になる。

(26) a この山は高くない。

b ?この山は低くない。

c この山は低いと言われているが、そんなに（それほど）低くない（じゃないか）。

(27) a この部屋はあまり広くない。

b ??この部屋はあまり狭くない。

c ?この部屋は狭いと聞いたが、あまり狭くない（じゃないか）。

また、(27) bと(27) cが(26) bと(26) cよりも不自然に感じられるのは、「あまり」が「そんなに」「それほど」よりも主観的で、指示体系「こ・そ・あ」の「そ」系列に於ける聞き手指向がないからだと考えたい。つまり、「そんなに」「それほど」は聞き手や聞き手も含めた外の人間が想定あるいは言明したことを受けて、話し手がそれと違った意見を述べるときに使い、「あまり」の場合はそれが考えられず、したがって前提になる文脈が存在しないと思われるから、不自然な文になるのであろう。

全ての形容詞がペアになって反義語の関係をなしているわけではない。特に感情や感覚などの内的状態を表す形容詞は、ほとんど反義語を有しない。「羨ましい」「懐かしい」「寂しい」や「痛い」「痒い」などには反義語がないと考えてよいであろう。これらの感情・感覚には反対概念さえないのだから、もちろん中間段階のものも考えられない。このような片方しかない形容詞が否定形を取るのに、やはり適切な前提を必要とすることは言うまでもない。

(四) 意志の否定と否定疑問文

動詞の表す動作を遂行するのに際して、動作主体の意志で制御できるかどうか、という基準によって、動詞を意志性のあるものと、ないものとに分けることができる。「帰る」

「行く」「入る」などが前者で「(雨が) 降る」「出来る」「似る」などが後者である。

動詞が意志動詞でしかも動作主体が一人称の場合、始めて意志性の問題が現れる。例えば(28)abでは「私」が動作主体だから、意志の表出と意志の否定が感じられるが、(29)のabは、たとえ文の末尾を強く発音しても、話し手の判断・主張の強さが感じられるが、動作主体の意志などは現れない。なお、例えば一方が「きっと雨が降る!」と言い、それに対して他方が「絶対降らない!」といったような言い争いの場合は、動作主体が無生物であるから当然、意志と考えられない。また、意志動詞が可能、受け身、過去の形になった場合、意志性が感じられなくなる。

(28) a 私は帰る!

b 私は帰らない!

(29) a 彼は帰る!

b 彼は帰らない!

疑問の時、否定疑問文が多く使われるのは日本語の特徴で、中立の疑問文としては肯定疑問より否定疑問の方が誤解を招く心配が少ない。例えば、(30) aは、中立の疑問としても解釈できるが、場合によっては皮肉を込めた言い方、つまり反語的な表現と解されることもある。(30) bの形で質問したら、聞き手がそういうふうには受け止めることは、まずないであろう。特に(31)のような、人に何か依頼する場合は、aよりbの方がずっと丁寧に聞こえる。

(30) a お金がありますか。

b お金がありませんか。

(31) a すみません。十円玉ありますか。

b すみません。十円玉ありませんか。

ところが、(32) aのように聞き手が意志動詞の動作主体と思われる否定疑問文は、中立

の疑問と解釈するほか、勧誘の意味になることが多い。(32) bでは動作主体が三人称で、(32) cでは「驚く」が非意志動詞だから、勧誘の意味にならない。(33)のように数量を表す副詞や数量詞が入ると、bとdで見られるとおり、数量副詞や数量詞が単純否定にかからないから、勧誘の意としか解釈できない。なお、(34)のように特殊な副詞の修飾で反語的(間接的)な命令の意に転じる場合もある。

(32) a (あなたは) ちょっと中へ入りませんか。

b 彼は中へ入りませんか。

c あなたは驚きませんか。

(33) a 少し飲みませんか。(⇒少し飲みましょう。)

b *少し飲みません。

c 一杯やりませんか。(⇒一杯やりましょう。)

d ??一杯やりません。

(34) a ぐずぐずしていないで、早く行かないか。(⇒早く行け。)

b もう止さないか。(⇒もう止せ。)

四. 否定の支配域と言外の意味

一般的な否定文では、否定される部分を明示するために、副助詞(とりたて辞)「は」を付けた方がはっきりするが、(35)のような文は主題や対比の意味として使われる場合でなければ、かなり不自然な文になるであろう。なお、日常の発話では場面の支えがあれば必ずしもこのような厳密さを要するとも限らない。例えば、(36) aは、(36) bと(36) cのような二通りの解釈ができる。(36) bの部分否定と解釈するには、本当は「全部は使わない」というふうに「は」を付けた方がよいのだが、日常会話ではこれを守らないネイティブスピーカーが多い。

(35) a 私(に)はお金はない。(⇒お金がない。)

b ??これ以上雨は降らなかったら、大変だ。(⇒雨が降らなかったら)

- (36) a 給料は全部使わない。 { b 全部使うというわけではない。〔部分否定〕
c 全然使わない。〔全称否定〕

これとやや性質が違うけれども、いっしょに考えたいものがある。例えば、(37) a (38) a (39) a のような文は、外国人学習者にとってはなかなか習得しにくいものである。これら理解させるには、否定の支配域とでも言うべき概念を導入した方がいいと思う。

(37) a せっかく高い金を出して海外旅行をするのだから、何でも見ないと損だ。

b 〔何でも見〕ない。

(38) a 僕は兄ほど頭がよくない。

b 〔兄ほど頭がよく〕ない。

c 兄ほどは頭がよくない／兄ほど頭はよくない／兄ほど頭がよくはない

(39) a AさんはBさんのように正直でない。

b 〔Bさんのように正直で〕ない。

c Bさんのようにには正直でない／Bさんのように正直ではない

この三文はその深層構造を考えないと、ややこしい文になりかねない。外国人学習者が(37) a の「何でも見ない」の形は「何も見ない」の誤用だと判定したくなるのは、日本語を習い始めた時から「何も…《否定形》」と「何でも…《肯定形》」といった文型を機械的に覚え、その既成観念に囚われているからであろう。そこで、もし(37) b のような構造分析を与えれば、非常に分かりやすくなるのではないかと思う。つまり、この否定は単に「見る」という動詞を否定するのではなく、「何でも見る」全体を否定し、「何でも見るということをしない」のような意味になるのである。一方、(38) a では、学習者が短絡的に「よくない」を「悪い」と解釈するから、「兄と同じように頭が悪い」といったような意味が直観的に浮かんでくるのである。これも(38) b で見られるような構造で説明した方がより分かりやすい。(39) a も(38) a の場合と全く同じである。このように、〔 〕の範囲を否定の支配域と考えて、いわゆる重層表現になった表層文の真意をまず明らかにしてから、より厳密に言う場合は(38) c と(39) c のように、適当な個所に「は」を入れればよいのである。

「ばかり」や「だけ」を含んだ否定文にも前述した問題が出てくる。例えば、(40)の各文の意味が把握できないのも、否定の支配域が分からないからであろう。(40) aは初心者には難しいかも知れないが、早とちりして意味を取り違えることは少ない。ところがbとcの二文を「ここを除いた外のところにばかり照る」「お前だけが男だ」というふうに解釈し、予期された正しい意味を見失うことが多い。もちろん、論理的にはそういう意味にもなりうるのだが、やはり文の後ろの()の中に掲げたように、肯定の命題全体に対する否定だと解釈するのが普通である。

- (40) a 強いばかりが男ではない。(強いばかりが男だ、というわけではない。)
b ここばかりに日は照らぬ。(ここばかりに照る、というわけではない。)
c お前だけが女じゃない。(お前だけが女だ、というわけじゃない。)

否定項の標識「は」の省略(脱落?)が多いと述べたが、数量詞が入っている場合、この「は」の省略がしにくくなるようだ。例えば、(41) bと(42) bは不自然である。ところが、同じ数量詞でも時刻を表す数量詞と量を表す数量詞とでは否定の言外の意味が違うのである。(41)と(42)のc dで分かるように、時刻を表す場合、数の多い方が自然だが、量を表す場合は数の少ない方が自然なのである⁽⁶⁾。なお、(42) bは、もし「出席しなかった人は30人いる」という意味なら、もちろん自然である。

- (41) a 僕は七時には起きない。
b ?僕は七時に起きない。
c 僕は七時には起きないよ。八時に起きるんだ。
d ??僕は七時には起きないよ。六時に起きるんだ。
(42) a 昨日の会議には30人は出席しなかった。
b ?昨日の会議には30人出席しなかった。
c ??昨日の会議には30人は出席しなかった。50人ぐらい居ただろう。
d 昨日の会議には30人は出席しなかった。せいぜい20人ぐらいだろう。

同じ副助詞(とりたて辞)と分類された「も」の場合を見てみよう。(43) aは肯定の形を取っているから、普通「も」の前の数量が多いと思われ、(43) bは否定の形を取るのでもその数量が少ないと思われるようだ。一方、(44)では、論理的には「一文も」「一つも」

「一杯も」の「も」が省略されたものだと考えたいが、実際「も」のない方が一般的である。これは熟成した慣用的な表現と考えるべきであろう。その外に「一人として…ない」「何一つ…ない」「誰一人…ない」などのような慣用表現があるが、数量詞の後ろには、やはり「も」を付けない方がよい。これらの表現にはいずれも「一」という要素が入る点に特徴が見られる。

(43) a この車は五百万円もした。

b この車は五万円もしなかった。

(44) a 一文無し。

b 雲一つない空。

c あいつの家に行ったが、水一杯くれなかった。

次の(45) a と(46) a のような、二つの動詞に続く否定文では、(45) b と(46) b に示したような否定の支配域を設けることもできるが、否定項標識の「は」を付与することはできない。

(45) a 父と相談して決めなかった。

b [(父と) 相談して決め] なかった。

(46) a 僕は学校へ行って勉強しない。

b [僕は学校へ行って勉強し] ない。

ここでは文末の否定が、「て」を挟んだ二つの動詞に対する掛かり方は色々な組合せが考えられ、内容を具体的に解釈することは難しい。(45) a を例に考えるなら、二つの動詞の肯定・否定の可能性は下図に示したような四種類が考えられる。

〈相談〉 〈決定〉

① 肯定	肯定	⇒ (相談して決めた。)	} ⇒ (45) a
② 肯定	否定	⇒ (相談したが決めなかった。)	
③ 否定	肯定	⇒ (相談しないで決めた。)	
④ 否定	否定	⇒ (相談もせず決めもしなかった。)	

つまり、「相談して決めなかった」という言い方は、①の「相談して決めた」の否定であり、②③④のどちらにもなるのである⁽⁷⁾。これもやはり支配域内全体に対する否定と考えたい。というのは、ここの否定は一続きの動作に対して否定するのであり、全体で見て「相談し且つ決める」のでなければ、どんな場合でもこの否定が適用するのである（④の解釈は②③よりも語用論的な前提を必要とする）。なお、ナガラ文の否定もこのテ文の否定と同じ解釈ができる。一方、(47) a のような同一の動詞の否定文や(47) b のような二つの形容詞からなる否定文では、否定の支配力は普通後ろの語にしか及ばないということもついでに触れておきたい。

(47) a 昼食はご飯を食べて果物を食べなかった。

b あのレストランは高くておいしくない。

五. おわりに

以上、見てきたことをまとめると、次のようになる。まず、否定の使用は汎言語的なものだが、使われる状況は言語によって違う。日本語の場合、否定表現が多いとよく言われるが、決して何の条件もなしに使われているのではない。なお、肯定あれば必ず否定ありという考え方は事実には反している。どちらか片方しかない場合も考えられるのである。

意味論的・形態論的に考えて、日本語の否定を存在、判断、状態、動作などの否定に分けることができる。これらの否定は、それぞれ違った統語論的制限が見られる場合もあるし、認知の基準や解釈の可能性も極めて複雑多岐である。膠着語だから、肯定・否定の要素は語末ないし文末に現れ、否定とその前の諸要素との呼応関係や、否定の支配力の及ぶ範囲などが問題になることが多い。特にいわゆる副助詞を使うか使わないかによって、意味が様々に変化し、母国語話者でさえははっきり捉えられない場合もある。

支配域という概念を設けたが、これはあくまでも外国人に対する日本語教育の立場から考えたもので、関係項目が多くなると、構造が複雑になり、本稿のような説明では割り切れないことはいうまでもない。そのために、例文をなるべく短くし、図式にして説明する

方法を取った。なお、言語文化研究の方法を組み込む余裕がなかったので、依然として明らかにされていない側面があると思う。今後の課題にしたいところである。

付 注

- (1) 裁判所で弁護士がよく「異議あり」と言うが、「異議なし」とはあまり言わない。それは後者が普通の状態だからであろう。つまり、「異議なし」の場合は黙っていればよいのである。
- (2) 「家政婦や弁護士の仕事をして食べていける」という意味の場合、この文はもちろん自然である。
- (3) 「…はずではない」の形は、普通前掲の例文のように「こんな」の後ろでしか使わないようだ。話し手の残念な気持ちを表す意味である。
- (4) 「暑い—温かい・涼しい—寒い・冷たい」の関係にある「温かい」「涼しい」は中間段階のものと考えられるが、数は非常に少ない。
- (5) 後部成分が「量」という文字の場合、例えば、「軽量」「少量」「微量」のように、ネガティブの形容詞も使える。
- (6) 「三時間はかからない。」「二週間は経っていない。」の「三時間」「二週間」などは、幅をもった時間を示すのだから、量を表す数量詞と見るべきである。これらが否定文に使われるとき、時刻を表す数量詞の場合と違った言外の意味を持つ。
- (7) 三上章の『日本語の構文』（36頁～37頁）では、否定の「逆応」と言って、このような否定文の多義的解釈の可能性を取り上げている。

参考文献

- 池上嘉彦（一九七五）『意味論』（大修館書店）
- 板坂 元（一九七一）『日本人の論理構造』（講談社）
- 奥津敬一郎（一九八六）『いわゆる日本語助詞の研究』（凡人社）
- 太田 朗（一九八〇）『否定の意味』（大修館書店）
- 金田一春彦（一九八八）『日本語（新版）上・下』（岩波新書）
- 久野 暲（一九七八）『談話の文法』（大修館書店）
- 国広哲弥（編）（一九八三）『意味分析』（東京大学）
- 柴谷方良（一九七八）『日本語の分析』（大修館書店）
- 時枝誠記（一九五〇）『日本文法 口語篇』（岩波書店）
- 原口庄輔（一九八二）『ことばの文化』（こびあん書房）
- 三上 章（一九六三）『日本語の構文』（くろしお出版）
- 三上 章（一九六三）『日本語の論理』（くろしお出版）
- 安井 稔（一九七八）『言外の意味』（研究社出版）
- 渡辺 実（一九七一）『国語構文論』（塙書房）